

風の末裔シリーズ・7th シーズンの2
～風の足跡（あしあと）・Ⅱ～



く尖塔の谷く

草原台地よりやや東、針葉樹に挟まれた深い谷。

夕暮れのおしんじに染まる川霧の中から、幾つもの巨大な尖塔が伸びる。塔の一つ一つのでっぺんには、土と石の住居が建ち、個々の窓に一人つつの住人が腰掛けて、それぞれの楽器を鳴らしている。

いつもの『音合わせ』の光景だ。

本来、幻想的な景色と相まって、それはそれは美しい物なのだ、???…何だか、ちょっと違う…??

「ナユタ！ 『弦ゆづる』を離れ！」

室内から師匠の声が飛び、窓辺の若者は、滑らせていた弓を止めた。

その建物だけ他より大きく、窓辺に座る人数も複数だ。

ナユタが音を止めた後も音合わせは続き、自分の音を挿んだ者から室内に戻り、弦を外してボディやブリッジを削り始めた。皆、ナユタより少し年若く、年配の女性師匠が、皆の間を回って調整の指導をする。とつやらのこは、楽器造りのヒヨコ達が集まる、学舎まなびやみだいなものらしかった。

ここ風露の谷で生まれた楽器は、音色も姿も格段に美しく、

昔の楽士達の憧れの的だ。職人の数が少ないので、注文しても、物によっては数年待ちなどザラだった。

風露の子供達は、優れた音感の特殊なDNAを受け継ぐが、それだけには安心せず、職人の長ラウ老師の鳴らす音に合わせ、日々腕を磨いている。

小さな部族が生きていく為、品質は決してブレてはならず、朝夕の音合わせは、とても大切な事だった。

生徒達の間を回り終えた師匠が、窓辺を離れない弟子に、椅子の一つを促した。

「ナユ、早くおいでなさい」

「ああ、はい…」

青年は気の抜けた顔で返事をした。音合わせを途中で止めさせられた事も、師匠が自分を後回しにした事も、あまり気になっていない風だ。

それより、さっきから彼の心を捉えて離さない事がある。窓から見える、山の斜面に一番近い塔…、外との玄関口『関』。そこに、先程から来客がいる。その風変わりな来客が、彼の目を釘付けにしているのだ。

「ナユタ!!」

師匠の怒りの声で、青年は今度こそ窓辺を離れて、自分の作業

台に戻った。

「でも、師匠様、私はこの三弦の何処を直せば皆の音に近付けるのか、分からないのです」

「……」

師匠は、困惑したシワを眉間に寄せた。実は、彼女にだって理解が付かない。でも教える立場としては、それを口にする訳には行かなかった。

「兎に角、今日は磨きなさい。表面を鏡のようにすれば、良くなるかもしれませんよ」

「はい…」

青年は素直に腰掛けて、既にピカピカの表面を、また磨き始めた。

『良くなるかも』って事は、やっぱり自分の音は、『良くない』んだ……。

夜が更けて、尖塔の灯火も消え、風露（ふうろう）の花が満開の谷に、シンシンと冷気が満ちる。

「ハクシユ!!」

谷川から少し上がった洞穴地帯。大きなくしゃみが「タマシて、十匹程のウサギコウモリが飛び出した。

「大丈夫？ タウト。風邪ひいたんじゃない？」

「大丈夫だよ。しっかり燃えにくいよな、この辺の木。ファー、焚火もっと大きく出来ない？」

谷の湿気で髪を濡らした男の子が、集めて来た薪を火の周りに立て掛けながら、鼻をくじゅくじゅいさせた。

「うーん、湿気ってるにしても、もう乾いてくれてもいいんだけれどねえ」

何度目かの焚き火の組み替えに苦心している女の子の、しめ縄みたいな三つ編みにも、水滴が染みてシユンとしている。

「燃えにくいんだ、その木は目が詰まっているから」

暗闇から不意に声が出て、二人は飛び上がった。

「怪しい者じゃないよ。ほら、この薪を使うといい」

風露草の茂みを越えて来たヒトは若い男性だったが、ビックリする程きれいな姿をしていた。一瞬、風露の花から精霊が湧いて出たのかと思った。

青年は、風露色の髪を滑らせながらファーの横にしゃがみ、持参した薪を焚き火に差し込んでくれた。ファーは声も出せず目を見開いて、ドギマギしている。

「あなた、だあれ？」

タウトがちょっとだけ不機嫌に聞いた。

「僕はこの辺に住んでいる者だよ」

「この辺って、あの塔の上？」

「ああ、まあ、そう…」

二人の子供は、顔を見合わせた。

「尖塔の風露の部落の規則では、子供以外は外に出られないし、外の人と話すのもダメって、風間言われたんだだけ？」

「うん…」

「何であなたは大人なのにここにいるの？」

「規則を破っているから」

子供達はまた顔を見合わせた。

「風間、窓から君達を見込んだ」

青年は、火の上がり始めた焚き火の前に座って、燃え損ねの薪を立てた。

額の真ん中で分けられた紫の髪は艶やかで、柔らかい絹の被り物みたいだ。整った額も頬もきめ細かく白く、炎のオレンジに照らされて、うっかり見惚れそうになる。

「それで、僕達に用事なの？」

いつもはお喋りなファーが言葉をなくして彼を凝視しているので、タウトは更に不機嫌に言った。

「用事…、うん、そうなのかな」

なんだかこのヒトはぶにゅぶにゅ喋って、信用出来るのかど

うか、よく分からない。

「えっとね、それ」

彼に胸元を指差されて、ファーは真っ赤になった。

「何だよ！」

タウトが思わず間に入った。

「えーとね、…笛」

「笛？ これ？」

ファーは、ちょっと前にテキ屋の笛吹きに買った丸笛を、手に持った。

「そうそう、遠目にそれが見えて。寂しそうだったから？」

「寂しそう？」

青年は、ファーの胸元の笛をじっと見てから、弾んだ声で言った。

「やっぱりそうだ。懐かしいなあ。僕のお師匠さんが作っていた笛だ」

「貴方は笛造りさんですか？」

ファーがやっと声を出したが、いつもと違って、何だかしおらしい声だった。

青年が答える前に、タウトが大声で言った。

「だけど、そんな笛、全然つままないし！音が鳴らないんだ

もの」

笛吹きに賣つてから、何度か挑戦してみたのだが、二人とも気の抜けたスカスカいう音しか出せなかったので、今ではすっかりファーのアクセサリーと化していた。

「だ、だから、これは練習しないと鳴らせない上等の笛なのよ。タウトの知っている玩具の笛とは違つたの」

ファーが慌てた感じで直ぐに反論したので、タウトはますますむくれ顔になった。

「まあ、見せてみて」

青年は、二人のいざこざには無頓着な様子で、女の子の首に掛けたまま、笛を手を取った。

「ああ、そうかそうか、ちょっと待ってね」

そう言つと、ポケットから小さなノミやら尖つた道具やらを取り出して、笛ではなく、傍らにあつた薪を裂いて、その木端を細工し始めた。

「・・・・・・」

不機嫌だった男の子も、長い指の中でみるみる形を変えて行く木切れに、思わず見入っている。

「よし、それを貸して」

ファーから受け取つた笛の吹き口に、青年は、今作つた小指

の先位の筒を差し込んだ。目分量で作つた筈なのに、それは隙間なくピッタリはまつた。

「さて、吹いてみてくれ」

青年に笛を差し出され、タウトはおそおそと新しい吹き口に口を当ててみた。

——ピュイ——

「鳴つたわ!」

ファーが驚きの声を上げた。タウトも目を丸くしている。信じられないくらい軽く簡単に、音が出たのだ。

「それで練習すれば、すぐに曲も吹けるよつこになるよ。取りあえず音が出なきゃ、やる気にならないものね」

青年はニコニコして道具を仕舞つた。

「へえーっ、へええ——っ」

タウトも素直に感心して、吹き口をひっくり返して眺めた。

「凄いや。この笛、最初からこの形ならよかつたのにね。お兄さん、お師匠さんより上手なんじゃない?」

「いや、違つ違つ」

青年は慌てて手を振つた。

「これは応急処置。吹きやすくなる代わりに、単調な音しか出なくなる。楽器としての質は、全然落ちちゃう。大きな音で色々

表現しようとするど、さっきの吹き口が正しいんだ。練習して慣れたら、その吹き口は外すといひよ」

「ぶっん」

「有難うございました。あの、さっき、笛が寂しがってるって言っていましたよね？」

かじこまったままのファーが聞いた。

「うん、楽器はさ、鳴らして貰えなきゃ、やっぱり寂しいじゃない」

「…は…」

ファーは笛を両手で持って、じっと見つめた。

「あつ、僕の父様が、書物は読んであげないと寂しがるって言うてた。それとおんなじ？」

「うん、そうそう」

青年は目を細めて、嬉しそうに掌を合わせた。

「それで、それが気になって、規則を破って来てくれたんだ。

風露のヒトって本当に楽器好きなんだね」

「うん」

話をする二人の横で、ファーは鼻の頭を赤らめて、口を結んでいる。笛を寂しがらせた事を、凄く気にしている感じた。

「でも、風露の職人さんって凄いいね。遠くからでもそつ

いのが分かって、それで、あつと言う間にこんな細工が出来ちゃうんだもん」

タウトが、ファーの様子を気にしながら、明るく喋った。

「いや、僕は職人じゃない。まだ修行中のヒヨコなんだ」

青年は下を向いて、膝の木屑を摘まんでバラバラと焚き火にくべた。

「へえ、どの位修行したら、こんな素敵な笛が作れるの？」

タウトは何気なく聞くが、青年はうつ向き角度が微妙に増した。

「えっと、…僕は、今は笛造りじゃないから、分からない」

「んん？」

「今は、三弦造りのヒヨコ」

「そ、そう、三弦の職人さんになるの？」

「ああ」

タウトも困った顔で、言葉を止めた。触れない方がいい事なのかしら？

「僕は、味噌っ粕だから」

青年が自分から話し始めたので、二人は黙って彼を見つめた。

「最初は、二胡造りの道に進もうと思ったんだ。母さんが二胡の達人だったから。でも、すぐに二胡じゃない方がいいって言

われて、それで笛造りのお師匠さんの所に住み込みで入った。とっても優しいお師匠さんだったけれど、やっぱりしばらくして、僕には笛じゃない方がいいって言われた」

「…それで、今の三弦のお師匠さんの所に？」

「ううん、笛の後は琴で、その後には鼓、三弦は七番目だから…、あれ、何か抜かしたっけ？」

「僕に聞かれても困るよ」

もっともなツッコミに、指折り数えていた青年は、肩を竦めため息笑いをした。

「要するに、僕は落ちこぼれなんだ」

タウトは、青年の造った吹き口をもう一度つくづく眺めた。

「こんなに細工が上手いのに、落ちこぼれだなんて、信じられなく」

「ああ、うん…、そういう小細工とか、楽器の本体を作ったり、音階を整えたりは得意だし、お師匠さんも、そこんこは誉めてくれる」

「ぶうん？　じゃあ、何がダメなの？」

聞いてしまったから、タウトは、しまったと思った。青年が「一気に暗い顔になって、黙ってしまったからだ。」

「じ、じゆん」

「いや、いいんだよ…、そうだよね、おかしいよね」

「おかしくなんかはないよ」

「おかしいよ。何で、何がダメなのか、自分でも分からないんだ」

青年は変わらず静かな口調だが、心底悲しそうなのが伝わってきた。

「お師匠さんは教えてくれないの？」

「お師匠さんは…」

青年は、もう一度焚き火に木屑をバラバラくべた。小さい火が、ポツポツと燃えて落ちていく。

「僕の音は、風露の音じゃないって言うんだ」

真ん中の薪が燃え尽きて、焚き火がガラリと崩れた。青年は、手を伸ばして、残りの薪を立て掛けた。

「音合わせしててね…、僕の音だけ違う。音程は合っているのに、皆の音と奏で合わない。僕の音だけひとつ一つと、浮いてしまうんだ」

タウトは言葉が出て来なかった。慰めたいけれど、専門的過ぎて、何て言っているのかさっぱり浮かばない。

「あの…」

黙っていたファーが、声を上げた。

「ファーは、笛の曲を覚えたいわ。簡単なのを一曲吹いて下さいませんか」

タウトはホツとして、心の中でファーに拍手を鳴らした。きつと彼女らしく気を使って、話題を変えようとしてくれているんだ。

「そうだね」

青年も表情を和らげて、笛を受け取って立ち上がり、子供用の吹き口を外した。

「じゃあ、短い小夜曲をレナーデを」

形の良い唇を笛に当てると、風ひとつない谷の、木も花も空気も、一斉に振るえ出した。

「ナユタの笛じゃのう……」

谷を伝って聞こえて来た笛の音に、尖塔の一番高い所に住むラウ老師は、顔を上げた。

「本当に申し訳ありません。いつもいつもご迷惑をお掛けしているのに、この上規則破りな……」

下座で頭を下げるのは、多分ナユタの母親で、息子と同じく美しい。

「頭をお下げ下さい。彼はもう親元を離れた身。責があるとし

たら、師匠である私ですわ」

母親の肩に手を置いたのは、風間ナユタに音合わせを止めさせた三弦の師匠だ。

「しかしあの音……」

向かいに座す笛職人の男性が言葉を詰まらせてそのまま黙り、そこに集った七名の各楽器の長達、皆一様に遠い笛の音に吸い寄せられた。

（風露の音ではない。優れている劣っているという次元でもない。大元の何かを違える、異質な音だ。我々の知る範疇ではない。強いて言えば……）

「貴方の音」

曲が終わって暫くしてから、ファーがぼつと言った。

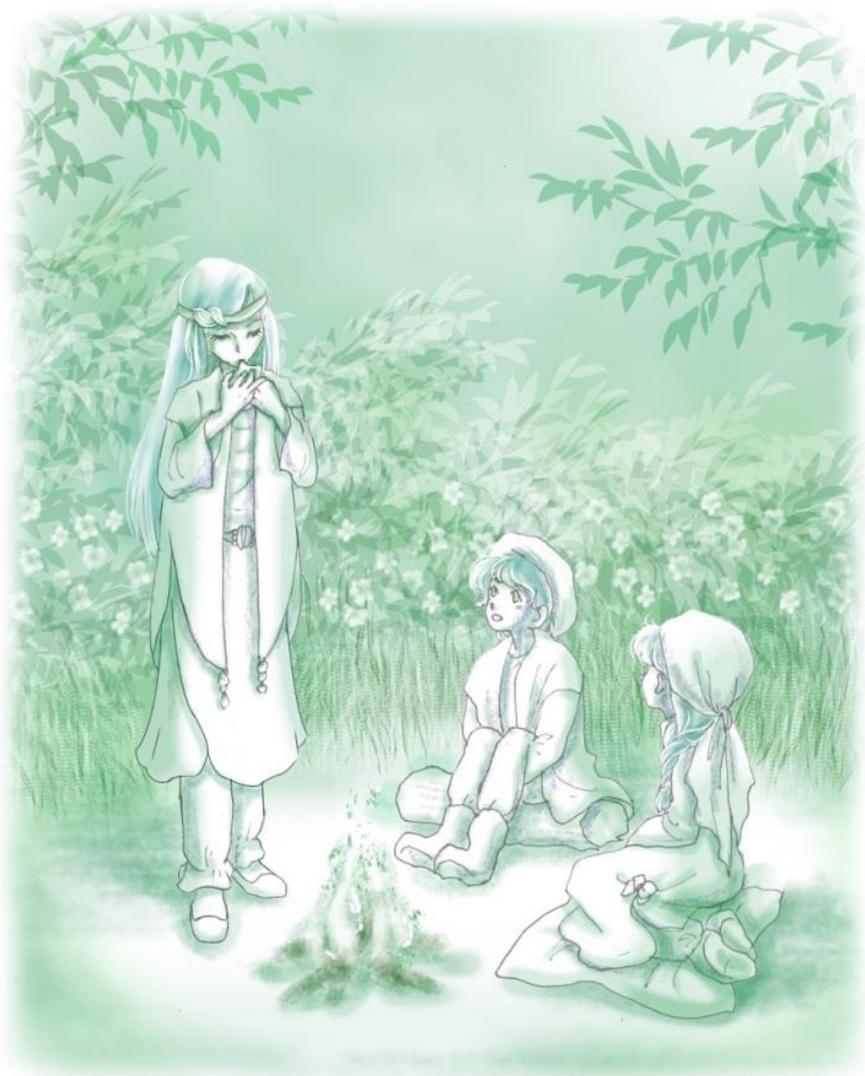
「ファーは好きです、貴方の音」

「うん、僕も好き。風間聞いたオトアワセも綺麗だったけれど……お兄さんの音の何が悪いっていうの？ さっぱり分からないよ」

二人に言われて、青年はちょっと笑顔になった。

再び、尖塔のラウ老師の工房。

「さて……」



「老師は、自分の右の客座で、先程からずっと黙っている男性に
向き直った。痩せこけた頬に鋭い眼、年季の入った旅装用マ
ント。服装と風貌から、風露の者ではないと伺える。」

「お考えは変わられないか？」

「ああ、ますます固まった」

ナユタの母親が、慌てて口を挟んだ。

「あの子は風露の者です。あの方もそうおっしゃいました」

「ああ、風露の者だ。だからって、蒼の妖精の血が皆無って訳
じゃない。貴方がたも薄々気付いておられるのだろう？」

集った職人の長達は、男性の言い分に、口を結んで黙るし
なかつた。

そう、あの子は、風露の民として申し分ない。ただ、彼の中
にある何かが、風露の中に収まりきらないのだ。

「ナユタは連れて行く。彼には、やるべき役割がある」

水色の妖精は、長い髪を払って立ち上がった。

「君達なら、すぐに吹けるように……」

青年が言葉を止めたのは、笛を返そうとした彼の右手を、女
の子の両手がガッシリ握って来たからだ。

「びびり出したの？」

「ファー？」

タウトも怪訝な顔で、二人を交互に見た。

「一緒に来て下さい」

「え？」

「一緒に来て、蒼の里を探して下さい」

「……」

「ファー？」

「タウト、このヒトが、蒼の長様の息子さんだよ。ナーガ様
は二、三度しか会った事ないけれど、さっき暗闇から現れた時、
びっくりして心臓が口から飛び出そうになった。ホントに瓜
二つなんだもの」

「えええ!!」

青年は緊張していた眉を緩めて、肩を下ろした。

「ごめんね、笛が気になったのは確かんだけど。それより、

君達みたいな子供までもが、僕を訪ねてこんな山深くまで来る
なんて……って思ってた」

「ホ、ホントに?！」

タウトが飛び上がった。

「じゃあ、僕達の為に、規則を破って会いに来てくれたの？
だったら、早く言ってくれば……」

「いや……」

青年は無機な声で、うつらうつら喋り出した。

「蒼の長の息子っていつてもね、僕はそちらの方でも味噌っ粘なんだ。風露の血の方を色濃く引いているからね。術どころか、風の事も、何も知らない。蒼の里が行方知れずになったのは知っている。それから、色んな人が訪ねて来たけれど……。僕は風露の者だし、行った事もない蒼の里の事なんて分からない。何の役にも立たない」

「……」

「君達が子供だけで、山中で野宿なんてやっているから、心配になって言いに来たんだ。そんなに粘って会いに来る価値、僕には無いんだよ、危ないから、早く家にお帰りよって」

タウトは、ガツカリで力が抜けた。

確かに、自分達は手掛かりを求めて、蒼の長の直縁の息子を訪ねて、風間、風露の関まで行った。けんもほろろに追い帰されてしまったけれど。

それでもこうやってこっそり訪ねてくれたって事は、きつと何か教えてくれるんだと、一瞬凄く期待したのだ。なのに、こんな普通の大人みたいな事しか言われないなんて。

「価値は、ありません」

「ファーは、握った両手をまだ離していないかった。」

「どうして自分は何も出来ないなんて決め付けてしまうの？ あんなに綺麗な笛が吹けるのに。貴方が価値のあるヒトだからだわ」

「あんなの……、風露の者なら、子供にだって吹けるよ」

「聞いて下さい、蒼の長には、同じ血を持つ者と引き合う強い力があるって……」

「僕には無理なんだってば、諦めて」

「お兄ちゃんを諦められる訳ない!!」

「ファーがヒステリックに叫んで青年が困惑顔になったので、タウトがそっと言った。」

「この子の兄さんが、蒼の里に留学したまま行方不明なんだ」「そう……」

「青年は悲しそうな顔をして、白くなったファーの指を、ゆっくりはがした。」

「そりゃ、僕に何とかしてやる力があれば……」

いきなり、背後にいた馬が、甲高いないた。

「———ザザザ!!」

「振り返る間もなく、タウトは地面にねじ伏せられた。」

「馬を！ 馬に何すんのよ！ きゃあ———!!」

「ファー?!」

複数の乱暴な靴音、怒声、何かがぶつかる音、青年の呻き

声……!

「ファー、ファー!!」

程なく、女の子ががんにがらめに縛られて、横に転がされた。

「へそ! このアマ、噛み付きやがった」

「そっちの男のガキも縛っとけ。馬はどうした?」

「スマン、逃がしちまった」

タウトを押さえ付けていた男が、彼の細い手足を革ベルトで縛りあげた。

「しかし、イイ話が聞けたぜ。蒼の長の息子は何の力もねえだ

と。」

「おおよ、しかもこうやって目の前にこのこ現れてくれた。

俺達や何てラッキーなんだ」

縛られた痛みと恐怖で、何が何だか分からない。

パニクっているタウトに、ファアの縛られた肘が触れた。馬を庇って暴れたんだろうか、酷く擦りむいて、血の感触がペツタリとした。

自分が怪我をした訳でもないのに、胸が締め付けられた。それで、さあっと冷静になった。あてになる物なんかない。自分

が何とかしなくちゃ。

「……何をすつもの?」

青年の声。押し潰されたみたいに苦しそうだ。

「知れた事、風露の財が欲しい」

「財って…、そんなに蓄えがあるように見える?」

「ふん、目に見える財ではないわ」

タウトはそっと身体を反転させて、声の方を向いた。

蹴散らされた焚き火と、数人の力の強そうな男達。二人掛かりで岩壁に押さえ付けられる青年。腕が逆手にねじられ、口が切れて腫れ上がっている。

その前に、リーダーっぽい大小二人の男が、立っている。大きい方の黒ヒゲの男は腕組みをしてふんぞり返り、小さい方の前髪がスタシになっている男が、さっきからペラペラと喋っている。

「お前ら呑気な風露の者どもには分かっていないだろうが、あの部落の産物は、世間でプレミアが付いている。お前らが惜し気もなく交換している価格の何倍もの値段で欲しがる金持ちが、ワンサといるのだ。風露を支配下に置いて旨い汁を吸いたい輩は、そこいらにごまんといる」

「うむ」

喋るのはスタシ禿げの役割のようで、黒ヒゲは偉そうに頷くだけだ。

「蒼の一族が消えちまってから、それを考える奴は多かったんだが、あそこには蒼の長の息子がいるって噂で、皆、二の足を踏んでいたんだ。俺らはまあ、部落の方キでも拐って、楽器の二つ三つ盗ってやる位のつもりで、この山に来たのだが。笛の音を便りに忍んで来たら、とんでもなく美味しいエサが転がっていた……って話だ」

「それ程美味しくもないよ」

青年は、冷たい岩壁に押し付けられながら、ぶっきりほうに言った。

「僕は落ちこぼれだもの。職人に成れない者は、あの部落では価値がない」

タウトの隣で、ファアの肩がブルッと震えた。

「蒼の長の息子だろうが?」

「うん、それもあのヒト達にとっては無価値だ。貴方達が、蒼の長の息子なんてどうなったっていいって思っているのと同じように、あのヒト達もそう思っている」

「へっ! 上手い事言いやがって」

一瞬怯んだ男達だったが、スタシ禿げが怒鳴って、すぐに皆、

態度を戻した。

「口先だけならどうとも言える。どうだ、このベッコウのボタンに寶貝のベルト止め。お前が大事にされている証拠だ」

「そんな物、楽器の端材で幾らでも出るんだよ」

「ほほお……」

男達はよだれを垂らしそうなイヤらしい顔をした。

「よし! そこまで言うのなら、今すぐ風露の間に乗り込んで、お前の喉に刃物を当てて試してやろうではないか!」

「カキ共はどうする?」

「風露の者じゃないだろう。いらん、いらん! 川に放り込んじゃえ」

えっ?!……

タウトは、今のは冗談か、聞き間違えか? 一瞬思考が停止して、それから身体が芯まで凍り付いた。

「まっ……て! その子達は関係ないだろ?!」

青年が初めて大声を上げて抵抗したが、男達に乱暴に押さえられた。

「おい、何も放り込まずとも……」

黒ヒゲが言ったが、スタシ禿げは肩を竦めて彼を見上げた。

「今の話を聞かせて、放てる訳がないだろう。同じ汁を吸おう

って輩が群がって来ちまう」

「うむ、なるほど」

「やめてっは！ 何でもあんたらの言う通りにするから！」

「兄ちゃん、自分の立場が分かっていないな。これから嫌でも言う通りにするしかないんだぞ。おい、ガキども早く放り込んで来い」

タウトの胸が早鐘のように鳴った。

この大人達は、そんな恐ろしい事を、朝御飯でも食へるみたいに、簡単にやろうとしている。村の大人が威して言う冗談とは違う。本気なんだ。

あのお兄さんの腕つぶしは、期待出来ない。

隣のファーは？ 怪我をしている上、自分と違って、手を背中にガッチリ縛られている。

考えなくちゃ！ 縛られて動けないファー、頼りにならないネガティブなお兄さん、三人を助けられるのは、自分しかない！

「イヤな仕事は、みいんな俺かよ」

大柄だが風体の冴えない男が、ぶつぶつ言いながら、二人の子供をまとめて肩に担ぎ上げた。

「ギヤア!!」

男の悲鳴と共に、地面に落とされた。転がりながら目に入るのは、今まさにファーを踏みつけようとしている大男。

「こいつ、まだ噛み付きやがった」

「だめっ！」

タウトは渾身の力で、縛られたままバツタみたいに飛んで、ファーに覆い被さった。男の踵が、思い切り脇腹に入った。

「へっとう・・・」

「ほおほお」

男達がニヤニヤしながら、口笛を吹いた。

「大したナイト振りだな、ガキの癖に。このお嬢ちゃんと、小さな恋の物語か？」

「そんなんじゃない!!」

タウトはもう一度ファーに被さり、噛まないように細心の注意を払いながら、一気に喋った。

「西風の長様と約束したのだ！ 『蒼の姫君』を『約束の殿方』の元に送り届けるまで、全身全霊お護りすると！」

身体の下で、ファーが放心するのが分かった。押さえ付けられている青年も、目を真ん丸にしている。

「ほおっ」

スタシ禿げが近寄って来た。タウトは崇高なナイト然と、人

相の悪いあから顔を睨み付けた。

「西風の長って、山の向こうの砂漠の…か？ 蒼の一族とは眷族だったな。この娘は何なのだ？」

「この方は……」

言葉を止めたタウトを、スタシ禿げは胡散臭さそうにねめつけた。青年も、早く何でもいいから言っただ！ という顔で、タウトを凝視している。

しかしタウトは、目に真剣さを滲ませて、口をギョッと結んだ。男達が待ちきれなくなるギリギリで、その口は、やっと開かれた。

「……ダメだ、お前なんかに言えるもんか！」

「何だと！ バカにしてんのか！」

男達は鬼の形相になったが、青年も呆気に取られた。命乞いを聞いて貰える、折角のチャンスだったのに？！

「いや待て、ふうーむ、ふむふむ」

男達の激昂と裏腹に、スタシ禿げは逆に落ち着いて、下敷きになったファーに松明を近付けた。

「やっぱりこの娘…蒼の妖精か？ ふむ、蒼の里が消えても、

他所に嫁いだりした血縁者が、何人か生き残っていると聞いたな。成る程成る程」

「どういう事だ？」

黒ヒゲも覗き込みながら聞いた。

「西風にいた蒼の妖精の血筋の姫を、『約束の殿方』…即ち、この兄ちゃんと嫁合わせて、蒼の一族を再興しようって計画だぜ。え、凶星だろ、坊主？」

「なんですってええ——?!」

タウトが返事する前に、下敷きになっていた娘が、雄叫びを上げた。

「あんた、あの時、長さまと屋根の上で、そんな話をしてたの?!」

戒めの縄が一気に引きちぎられ、女の子は跳ねるように立ち上がった。まさか、こんな女の子に、何でそんな力が？！

被さっていたタウトは吹っ飛ばされて、後ずさったスタシ禿げの方に転がった。

「お、おいおい…」

ちょっと驚いたスタシ禿げだが、男の子の顔が血にまみれているのを見て、顔色が変わった。

「伏せろ！ その娘、ヤバイぞー！」

皆が咄嗟に伏せた上を、怒りのオーラで奮い立った女の子が飛び越して、這いずって逃げるタウトを追い掛けた。

「許さない！ ヒトを騙して、バカにしてえええ!!」

「ひい、姫君、お許しを」

「たあああ——!!」

ファーが気合いと共に手を振り下ろすと、男の子はエビみだいに跳ね上がって地面に叩き付けられ、今度は青年の方に転がった。

「だっ大丈夫か?!」

「お兄さん、逃げて！ 怒り狂った姫様は、見境がなくなる！」
「えっ。」

女の子の指の先は、今度は青年に向いていた。

「あんたもよ!! 自分には価値が無いですってえ?! 価値なんか、自分で作るモンだわ! ヒトに決めて貰うモンじゃない!! あああ——っつ、腹立つっつっ!!」

「お兄さん、危ないー!」

男の子は、押さえ付けていた男ごと、青年に体当たりした。

次の瞬間、女の子の攻撃が当たって、全身感電したみたいに飛び上がって倒れた。

「お、おい、坊主……」

突き飛ばされた男は、振り向いてギョッとした。男の子の身体が、変な方に曲がっている。

「だ、助けて…お、お兄さん、痛い…、あ・ああ、姫様、それ

だけは勘弁してえ——・・・!!」

「え、え、え?!」

「うおおおお——!!」

女の子は金切り声を上げ、頭上に掲げた両手から、物凄そうな攻撃を放とうとしている。

「ひええ!」

スタし禿げが一番に逃げ出した。彼が逃げると、黒ヒゲも、他の男達も、蜘蛛の子を散らすように八方に逃げた。

——ザザザザ——!!

次の瞬間、上空から急降下して来た馬が、女の子をさらった。

「あっ!」

男達が一瞬呆気を取られている間に、馬は次の一步で男の子と青年も引っ掛けて、あっという間に上昇した。

「やられた! 馬鹿者ども!」

黒ヒゲが地団駄踏んだ。

「そんなに凄いい攻撃力なんか無いんだ。あつたら最初に簡単に捕まるものか」

「ああ! 俺には分かっていたさ!」

スタし禿げが、この期に及んで強がって叫んだ。

「三人乗りの馬で、そう遠くまで行けまい。その辺を探せ!

あの軟弱な兄ちゃんだけを拐つんだ」

——空が歪んだ——

「んんんんんん!!!!」

真上から、雷鳴のような音が近付き、男達の中心に、巨大な緑の槍が、稲妻みたいに突き刺さった。

足元は岩盤だ。その堅い岩が粉々になって、スローモーションで舞い上がり、そこから四方にバリバリと亀裂が走った。

「ひいっ!」

男達は、腰を抜かして地面に這いつくばるしかなかった。

「や、やっぱり、すげえ攻撃力持っていやがるんじゃないか! あんなの相手に出来るか!」

もう、誰が首頭を取るでもなしに、男達は、夜闇の中、方々の体で山を逃げ出した。

「追い掛けて来ないみたいだね…」

谷の反対側の茂みで、馬と三人は、息を潜めていた。

「諦めてくれたかなあ」

タウトは首を伸ばして、残り火のチラつく対岸を見やった。

「なんだったのかな、さっきの雷みたいない凄いや。ファー、何かした?」

「ううん、ここまで馬を飛ばせるのに、精一杯だったもの。焚き火に、弾ける物でも入っていたのかしら? お兄さん、分かる?」

「ひっ!」

さっきから微動だにしなかった青年が、座った形のまま飛び上がった。

「あつ…あの…」

「ああ、これが」

タウトが自分の顔を掌で拭った。それからそろりと動いて、川まで降りて顔を洗い、袖に水を含ませて戻って来た。

「これは、ファーの怪我の血だよ。血って少しの量で広がるから、大袈裟に見せられるんだ。ファー、肘見せて。洗わなきゃ」

「大丈夫よ、こんなの」

「膿んだら困るよ」

強引に手当てをする男の子と、大人しく手当てをされる女の子を、青年は茫然と眺めていた。

「えっと…蒼の姫…?」

二人の子供は、同時に目を真ん丸にした。

「お兄さん? もしかして、あれ本気にしているの?」

「まさか…、蒼の長の息子さんだよ、タウト…」

「………」

取りあえず、黙っている事にした。

「僕達、この間まで、旅芸人の一座と、一緒にいたんだ」

「ファアのすり傷に付いた砂粒を丁寧に取りながら、タウトが説明した。」

「ファアに被さった時、ちゃんと『縄脱けの出来る縛られ方』をされている事に気付いたんだ。あ、縄使いのおじさんに習ったんだけれどね。ほら、こういう角度で腕を交差させると、どんなにきつく縛ったつもりでも、後で隙間が出来るでしょ」

「う、うん…」

「身体の下でこっそり縄抜けを手伝って、後は逃げ出すタイミングだったんだ。で、一芝居打った。大道芸に草レスリングってのがあってさ。出来合いの格闘を、本気みたいに見せる奴。」

「迫力のある吹っ飛び方とか受け身とか、壊れたみたいに見える倒れ方とか」

「……」

「格闘家のおじさん達って、酔っ払うと、無理やり教えたがるの。でも、教わっててよかったあ。何が役に立つかわかんないね」

「そ、そう…」

青年は、まだ嘘と現実の境目が分からない。

「そ、そつえば、あれ!! 蒼の一族再興の為の縁談って。凄
い事考え付くよね。一瞬本気に…じゃなくて、感心したよ」

「タウトは、まだ目を真ん丸にした。」

「僕、そんな事言っていないし」

「えっ?」

「ファアも、きょんとした顔で言った。」

「そつよ、タウトはそんな嘘付いていないわ。あの禿げのおじ
さんが、勝手に言い出したんじゃない」

「え? あ…?」

「確かにそつだ。」

「僕は『蒼の姫』とか『約束の殿方』とか、あのヒトが食い付
きそつな言葉を、並べただけだよ」

「……」

「えつとね、マジシャンのおじさんに習ったの。ギャラリーの
中に、『俺は他の連中と違う、騙されるもんか』って自信満々の
ヒトを、あらかじめ、見付けておくんだつて」

「は…あ…」

「で、そついつては、こちらが何を言っても、頭から否定し
かしない。でも、好物そつな尻を振り撒いて、わざと黙ってい
ると、勝手に思い通りの事を喋って、皆を煽動してくれるんだ

って。本当にその通りだったね」

『蒼の姫君』には笑っちゃったわ。噴き出すのをくらえのに必死だった」

飄々と喋る子供達を前に、青年は、何とも言えない顔で、黙っていた。

呑気にしているが、この子供達は、さっき、まさに殺されかけたのだ。怯えて震えあがって何も出来ないのが、自分の知っているこの年頃の子供だ。

この子供達は、違う。自分に何が出来るか考えて、一生懸命、自分で何とかしようとしたんだ。こんなに小さな身体の中に、いったいどれ程の勇気が詰まっているのだろう。

『蒼の姫』の台詞の中には、芝居じゃない部分も混じっていたような気がした。

男の子は、女の子の怪我の手当てを終えた。それから立ち上がって、二人でテキパキと馬の装備を整え始めた。

「風露に、お兄さんを送らなきゃね…」

女の子が下を向いて、小さな声で言った。

自分が無理に粘って、結果、この純朴なお兄さんを酷い目に遭わせてしまった。風露の職人として清廉に生きて来たヒトに、

何とも汚い現実を見せてしまった。もう、外に出てくれなんて頼めない。

「タウト、少しの間、ここで待っていてらねえ」

「うん」

「さあ、お兄さん、乗って下さい」

ファーに促されたが、青年は黙って突っ立ったままだった。

「お兄さん？」

「さっきのヒト達…」

「…」

「あれは普通なの？ 風露の楽器が、音楽の為ではなく、お金儲けの道具として扱われているって」

二人の子供は、困った顔を見合わせた。

「うーん…、お金持ちに知り合いがないから、よく分からないけれど…、そういう価値観って、普通にあるんじゃないかなあ？」

「気にしなくてもいいと思うわ、お兄さん。風露では、外の世界の事は、関係ないのでしょっ？ 風間、関でそう言われたわ」

「うん、僕もそう思っていた」

青年の声の感じが変わったので、二人は同時に彼を見た。男

達に殴られた傷が痛々しいけれど、不思議に、最初に会った時より、輪郭がはっきりと感じられた。

「僕は風露に戻らなう」

「えっ?!」

「お兄さん?」

「君達の役に立てるかは分からないけれど。でも…、連れて行って貰えないか?」

「勿論!!」

二人の子供が、同時に両側から手を握った。

その時、いきなり、何かに照らされた。

「?」

さっきの男達? うっん、違う、真上からの光だ。

見上げる空から、光る物が降りて来る。近付いて光が消える、それが馬だと分かった。

降り立った馬は、馬具を付けていたが、カラ馬だった。

「ど、どこから?! 誰の馬?!」

空にはただ、星が有るばかりだ。

「この馬…、何なの?」

ファアが馬を見つめて、息を呑んだ。草の馬なのだろうか? 恐らくそつなのだが…。でも、母の草の馬は、整って綺麗に編

まれていた。こんな、枯草を丸めたみたいなバサバサな、濁った白緑色の草の馬なんて?

手綱に、菅紙が結び付けられている。

中身は風露の文字だった。

「何て書いてあるの?」

青年は、天を仰ぎ見ながら呟いた。

「破門状だ…七人の師匠からの…」

地上の三人からは見えない上空の結界に、夏草色の馬と、人影があった。

「貴殿が連れて行くのではなかったのですか?」

馬の背に座すラウ老師が、真横に浮かぶ水色の妖精に語りかけた。

「外界に出る運命にはあったのだが、どうやら導き手はボクではなかったようだ」

「ホウホウ…」

「心配か?」

「それは、風露の子は皆我が子ですから。野党どもを一撃で蹴散らす緑の槍の持ち主に預かって頂いた方が、安心ではありませんじゃ」

「案じなされるな。さすがの、あの屁理屈魔王の息子と、直情



馬鹿の娘だ」

「ホホホ」

「じかじ…」

妖精は、長い髪を揺らして、傍らの木の天辺に立つ片羽根の少年を見やった。

「驚いたな、お前が馬を貸す気になるとはな」

少年は、はなだ色の瞳を細めて、にはっと笑った。

「ナユタ」

「うああ!!」

短い悲鳴がこだまして、風露の青年が、草原の空に一回転して落っこちた。

「ナユサーン、大丈夫?」

青毛に跨がったタウトが、越冬笹を蹴散らして追いついて来た。

「そんなに手綱にしがみついちゃダメだよ。前屈みになるから、跳ね上げられちゃうんだよ」

「そんな事言ったって…」

青年は、恨めしそうな顔で、シレッとそっぽを向く草の馬を見上げた。

「あらら…」

野宮地の準備をしていたファアの目の前でも、走って来た馬は意地悪く急停止して、乗り手を「ロン」と落っこした。

「大丈夫ですか？ 落ちるのだけは上手くなりましたねえ」

「うう…」

白い馬は何食わぬ顔で、ファアに甘え声で鼻を擦り付けて、麦をねだった。

「僕には、白眼剥いて頭突きする癖に…」

「そんなに難しいかなあ」

後から来たタウトの青毛は、素直に減速して、優しく停止した。

「ね、ねえ、僕、やっぱり、そっちの馬で練習したい…」

青年は羨ましそうに小声で言った。

「うん、だから僕も、そうすれば？ って言っているんだよ、

ファア。馬を交換して練習しようって」

タウトも意を得たりと、ワクワク顔で女の子を見た。

「ダメだって言っているでしょ」

ファアはブンとそっぽを向いた。

「タウトは草の馬に乗ってみたいだけでしょ。その青毛で、飛べるようになるまで訓練するんじゃないっけ？ 最初から

飛べる馬に乗ったって、練習にも何にもならないじゃないの」

「いいじゃん、ちょっとくらい…」

ぶつぶつ言うタウトは無視して、女の子は今度は青年に向いた。

「この馬はナユさんの馬でしょう？ 他の子を気にしたら、この子が可哀想です」

「んー…、僕の馬とはいえないんじゃないかな。旅に要り用だから、貸してくれただけだよ、誰かが」

「誰がだっというんです？ 草の馬ですよ」

「分からないけれど、老師様の知り合いの誰かだよ、きつと。

草の馬だからって、僕と特別な関わりなんかはないと思うよ。こっちは落とされっ放しなんだから」

「……」

馬と繋がりのない一族で育った青年と、草原の民の血を引く自分との間にある溝を、ファアは無理に埋め立てようとはしなかった。彼女は話を曖昧に終わらせて、さっさと野宮の準備に戻った。

二人は、今日の練習はここまでと決めて、手綱を引いて川に向かった。

「タウトは馬を習い始めてどのくらいなの？」

チヨコマカと落ち着かない馬の爪を苦勞して洗いながら、青年が聞いた。

「あっちの砂漠を出てからだから…二ヶ月チヨイかな。市場で働いていた時とか休んだから、みっちりじゃないけれど」

「二ヶ月…、凄いね…」

首を下げて大人しく洗われる青毛を、ナユタはまた羨ましそうに見た。

「僕、何カ月経っても、この馬に乗れる気がしないよ。ましてや空を飛ぶなんて、絶対に無理！」

「僕も飛ぶとかまだ分かんないよ。時々ふっと、空気を踏む感じがする位で」

「それでも凄いよ…」

鞍と頭絡を外してやると、二頭の馬は嬉しそうに水浴びを始めた。

「こつやって見ていると、普通の馬と変わらないよね」

タウトは、川原の草の上に「ロンとお向けになった。

「薪拾って帰らなくちゃ」

「あんなだけ頑張ったんだから、休憩したっていいじゃん。ファアはヒトが疲れないって思っているんだ。自分がちょっとタフだからって」

「ああ…、あのちっちゃい身体のどこにあんなエネルギーが…って不思議な位、タフだよな」

馬達は、思う存分水遊びを堪能し、今度は二頭でじゃれ始めた。立ち上がって相撲をしたり、タテガミの付け根を噛み合ったり。草の馬は普通の馬に比べて、細身でひよろひよろしているのだが、ムチみたいにしなやかで、力負けしていなかった。

「草の馬って、何なのだろうね」

「さあ、改めてそう聞かれても…。ファアのお母さんの話では、蒼の一族でも、全部は分かっていないらしいよ」

「ぶっん…」

青年は、菅草を一本折って、口にくわえてクルクル回した。

「蒼の里が消えて、そういうのを知っているヒト達が消えて。

この世の歴史の中に、そうやって忘れられて埋まって行く物って、沢山あるだろうね」

何だか凄く他人事に言う青年を、タウトは半身起こして見返した。

「ナユさんがいるじゃん」

「僕はダメだよ。何も知らないもの。小さい頃、時々父が訪ねて来たけれど、何か教わった訳でもないし。だいたい父は、姉に会いに来ていたんだし」

「お姉さん、いるの？」

「うん、でも僕が三つ位の時、蒼の里へ行っちゃったから、ほとんど覚えていないけれどね。姉は蒼の妖精だったんだ。父の跡取りとして、望まれて蒼の里へ迎えられたらしい」

「……」

「遠い昔だよ。僕にとっては関係ない遠くの出来事だった」

二頭の馬は遊びに飽きて、ぶるんと身体を揺すった。

「戻ろうか」

青年は立ち上がったて馬の方に歩いた。

「あ、…うん」

タウトは一拍遅れて立って、二頭の馬に曳き綱を付け、陽の傾いた草原を、並んで野営地に戻った。

蒼の里を探すという目的で引っ張って来られたナユタだが、実際には、思いつきの何の役にも立たなかった。

いきなりピキーンと何かを閃くとか、突然ドカーンと覚醒するとかは、どうもあんまり期待出来そうになかった。蒼の長の息子という先入観がなければ、あくまで彼は、おっとりした平凡な青年だった。

だが、世間はそれでは済ませてくれない。

「あのうー」

早なり小麦の畑で、収穫に勤しむ編み傘のお爺さんに、ファアが声を掛けた。

「お手伝いしますので、麦を少し分けて頂けませんか？」

長旅の最中、今までこうやって食料を手に入れて来た。子供二人だと大概受け入れて貰えだし、一生懸命働くその他の家からも声が掛かって、連鎖して働けた。

ファアの声で振り向いた畑の老人は、青年を見て飛び上がった。

「あ、蒼の里の…お、長様?!」

「いえ、違います…」

ナユタはうつ向いて、ぶっきらぼうに言った。

「しかし、そんなに瓜二つな…? おお、それは草の馬! 　で

は、蒼の一族のお方ではあられるのか?」

「あー…、それも言えなくて…」

ナユタが「ニヨ」「ニヨ」言っている間に、年寄りは家族を呼び、家族は子供達を呼び、子供達は「近所さんに言いふらして、何だか大事になってしまっただ。」

「麦がお入り用で? いかほどですか? トンでもない、手伝いなんぞさせられません。おい、親戚中に声をかけて来い」

「いえ! 　いいえ、いいんです、いいんです!」

ほつほつのでいで逃げ出したが、村の出口には、もう子供や年寄りを交えた大勢が待ち構えている。

「先月生まれたうちの初孫に、どつか名付けと祝福を」

「この子の癩の虫が収まりません。変な憑き物があるのでは」

「隣村との水源争いの調停を」

「あの、蒼の里は復興するのですか？ 教えて下さい、うちの年寄りを安心させてやりたいのです」

それら一人一人を穏やかに振り切って、村を後にした時には、三人とも汗だくだった。

「いったい何なの、蒼の一族って。よろず屋みたいなもの？」

「あちこち引つ張られたナユタが、衣服を直しながら言った。

「よろず屋じゃないです。そんなに何でも出来る訳じゃないもの。ただの抛り所…、何かを信じていると、安心出来るんだと思う…」

「ファーも髪を直しながら、母に聞いていた事を答えた。

「僕、分かるよ、僕の村がああだったから」

「タウトの言葉に、二人は振り向いた。

「小さくて、時々食べ物に困っちゃうような村だったけれど、

巫女の母様を頼りにしていれば、みんな安心出来て幸せだった。

母様が急な病気で死んじゃった時は、皆、天が落ちてくるのか

って位、悲嘆に暮れた癪に、お姉ちゃんが新しい巫女になって言ったら、地面が盛り上がるみたいに大喜びした。でも、その間、晴れない空も、実らない畑も、誰かが病氣だとかも、何にも変わっていないんだ」

ナユタはよく分からない風に、首を傾げた。

「何も変わらないのに、信じられるモノがあるだけで幸せになれるの？」

「それが信仰ってものなのかわ」

「ふうん…」

ナユタはやっぱり納得しかねる顔をした。

「ファーとタウトの二人だって、言っちゃえば、信みたいない

気持ちで、風露のナユを訪ねたのだ。

しかし、一緒に来てくれる事にはなつたものの、この青年は頼りなさ気で、何もかも他人事だった。信仰なんて、蓋を開けてみれば、そんな物なのかもしれない。

ナユタが悪いんじゃないのは分かっているけれど、心の何処かでピキーンやドカーンを期待していた二人は、微妙に複雑だった。

初夏とはいえ草原の湿った朝は、キンと張った冷気を伴う。

しかし二人の子供は、野営の天幕で、別の寒気を感じていた。

「ファー、気付かなかったの?!」

「タウトこそ、隣で寝ていたのは貴方でしょう?!」

ひんやりした毛布を空にして、風露の青年は姿を消していた。二人は、長いのか短いのか分からない時間、脱力して座り込んでいた。

ナユさんは…多分…失望したんだ…傷付いたんだ。ガツカリして風露に帰っちゃったんだ。役に立てると思ってる旅に加わったのに、現実、そんなに簡単じゃなかった。ナユさんのせいではない。上げて落としたのは、自分達だ。

蒼の里を見付けるなんて怠巻いて旅立ったのに、空回りばかり。何か進展があった? ううん、何も変わらない。拳げ匂、平和に生きていたヒトを巻き込んで、振り回して…。

ファーがのろのろ立ち上がった。

「行きましょっ」

「何処へ?」

「何処って、進むのよ。それしかないでしょう」

「ナユさんを追い駆けようよ」

「追い駆けてどうするのよ。嫌になっちゃったヒトを引き摺って行く訳には行かないでしょう」

「……」

「何て言えばいいのよ…」

「…そうだね…」

ファーがベそをかきそうになったので、それを見たくないタウトは、慌てて天幕から出た。

「うあつ!」

「あれえ?」

タウトの叫びと、聞き慣れた間延び声に、天幕の中のファーも飛び出した。

途端、でっかいフサフサが目の前を覆った。

「きゃっ!」

「あははは、どっどっ」

フサフサは、栗毛の巨大な馬車曳き馬で、その上にデンと収まっているのは、土埃だらけの髪を無造作に束ねたナユタだった。

「えっ、何、どっどっ? えっえっ?」

「昨日の編み傘のお爺さんがさ、朝ごはんどうやって。だから迎えに来たんだ」

「……」

「……」

「夜明け前に目が冴えちゃって。二人を起こすのも悪かったから、一人で歩いて出掛けたんだ。もっと早くに戻るつもりだったんだけれど」

不思議に器用に馬を御しながら、青年はのどかに話した。巨大な晩馬の平らかな背中には、鞍ではなく座布団が乗せられ、ナユはそこにあぐらをかいている。乗馬もへったくれもない。

タウトとファーは、狐につままれた顔で、馬達と共に後ろに付いて行った。

『信仰』ってものがヒトを幸せにするのなら、みんなに幸せになつて貰おうと思つて」

「……どうやって？」

「言われた通りにするだけさ。額に手をかざせと言われればそつするし、痛い所を撫でろと言われればそつするし」

「……」

「喜んで笑顔になつてくれたよ、みんな」

屈託なく微笑む青年に、ファーが不安そうに聞いた。

「だって…、えと、ナユさん、何の力もないって、自分で言つていましたよね？」

「うん、ないよ。みんなにもはっきり言つたし」

「じ、じゃあ、何で？」

「何も変わらなくても、信じていれば心が幸せになるって、昨

日言つていたじゃない」

ファーは目を見開いた。

「お気持ちが好きだったのです」

三人を招いた食卓で、農夫一家の主が言った。

「自分は何も出来ません、がっかりさせてすみませんと、わざわざ言いに戻つてくれたお気持ちです。そんな事、自分から言いに来られる方、初めてお会いしました」

その後、どうしてもこの方法で麦を得たいんですと言いつつ、朝の畑を無理矢理手伝つたらしい。

「あまり役に立たなかつたけれどね」

齒に衣を着せないおかみさんが、大口を開けて楽しそうに笑つた。

子供達が目ざとく、ファーの首に掛かった綺麗な笛を見つけました。せがまれてナユタは一曲披露した。

そうして手を振つて、三人は部落を後にした。

風露の青年が手を当てた老人や子供の病がたちどころによくなるなんて事は、勿論なかつた。しかし、病床の老婆は、穏やかに微笑んでいる。

「おばあちゃん、どうしたの？」

「さっき聞こえたあの笛。昔、蒼の長様に聞かせて頂いた二胡

の曲と同じじゃ。同じように柔らかく心に染み込む。ああ大丈夫、蒼の里はきつと大丈夫、この世界も大丈夫だ」

季節は風を温め、地面からの熱気が草の匂いを強くした。夏草はピンと葉を張り、草原を行く三人の影にも、ピンピン尖った部分が多くなった。衣服の破れほつれや、ファーが流行りのシャギーと称して、男二人を雑に散髪した切り口だ。

風露の青年も、薄汚れた分血色がよくなって、今では馬上姿も様になっている。もっとも鞍の上にあるのは、あの栗毛の背にあった座布団だ。ナユタがかなり気に入った様子なのを見て、編み傘のお爺さんが、どうぞどうぞと持たせてくれたのだ。それで青年は、自分の衣服のボタンや装飾、すべてを外して、既にそっと置いて来た。

草の馬は草の馬で、そんな青年が自分の背中でのほほんとあぐらをかくのを、どこ吹く風で許している。どつちや無理に気張って乗りこなさうとされるよりも、自然な形で接される方が、好みだったらしい。

ボタンがなくなつたので、すべての衣服がだらしなく垂れ下がって風に揺れ、まるで何処かの行者だ。

ファーはもう何も言わなかった。この青年に自分の常識は狭すぎると、反省したらしい。

タウトはタウトで、たまに草の馬に乗せて賣えるようになって、ご満悦だ。もっとも振り落とされっ放しで、飛ぶのにはほど遠かったが。

こんな風に、収まる形に収まった三人は、蒼の里を訪ね訪ね、草原の端からの端まで、旅をして歩いた。

Ⅲ へ